

ある日、父がいつになく真面目な顔をして言った。

「ふるさと納税のことなんだけど。」

ちょうど家族が全員揃っていたので、皆少し驚いて父の方を向いた。

「石川県に寄付しようと思う。能登半島地震の義援金。返礼品はない。助け合いたいから。」

母はそんな父を見て

「私も寄付するよ。」

と言った。今まで納めてきた税金の中で何よりも実感のある納め方だ、と。

その日は能登で過ごしている人々のことを思い、不安に襲われたり寒さに震えていることがないようにと祈って過ごした。

その後、石川県のホームページで能登半島地震に係る寄付について調べてみた。

主要4社の寄付仲介サイトを通じた寄付額は3月下旬までに計五四億円超と過去最多に達する。災害対応に追われる夜災自治体の代理として寄付を受け付ける自治体も百を超え、災害支援の手法として定着してきたと書いてあった。仲介サイトは「災害支援寄付」などの名称で災害時に寄付を募っている。寄付者への返礼品はなく、仲介サイトも自治体から手数料を取らない。

この取り組みは紛れもなく優しさと思いやりの結果が生み出したと思う。私は、何かあった時に手を取り合って助け合う日本のことを誇らしく思った。

また、ふるさと納税の仕組みについて分からないことが多かったので調べてみた。

ふるさと納税とは、自分が好きな自治体へ寄付できる制度だ。人口の多い都会は税収が多くなり、人口の少ない地方では税収が少なくなるといった税収が偏ってしまう問題を解決するために導入された。自分が選んだ自治体へ寄付をすると、お礼として返礼品が届くという仕組みになっている。また、寄付金のほとんどは、年収額等に応じた一定の限度額まで、住民税控除や所得税還付を受けられる。実質負担二千円で地方の特産物などをもらえることから利用者が増えてきているそうだ。様々な自治体の中からどこに寄付をするのか考え、届いた返礼品を見ながら思いを馳せるのは視野が広がる良いチャンスになる。さらに、返礼品を作り、送るという仕事で地元の生産者の皆さんにも活気が生まれ、良い歯車となる。

今回は石川県に寄付をし、返礼品こそ形としては受け取らなかったが、私には目に見えないものを頂けた気がしている。このお金が生きた使い方をしてもらえることを願っている。

寄付をして以来、ニュースで見た被災者の皆さんの様子が自分たちのことのように近く感じ、関心を持つきっかけになった。

あたたかい心を寄付し、助け合う。それが一番の税の使い道なのかもしれない。